

# 『陸奥話記』 補遺考

伊藤博幸<sup>※</sup>

## はじめに

11世紀中葉、朝廷が派遣した陸奥国守源頼義軍と奥六郡を勢力基盤とする鎮守府在庁の安倍頼時（頼良）一族・一門との戦いを克明に描いた軍記物が『陸奥話記』（以下『話記』）である。この文学作品については、『将門記』とともに初期軍記物の劈頭を飾るものとして、国文学・歴史学を中心にこれまで多くの研究がある。ことに『話記』諸本の校訂を通した本文の検討は詳細をきわめ、多くの新見解が提示されてきている。

しかしながら、本文校訂においていくつかの未検討の箇所も存在する。小稿で取り上げる「坂面伝母礼麻呂（麿）」の条についても、その訓み、なぜこの表記なのかも含めていまだ検討されていない。従って、表記された人物が誰かも明確な根拠を提示できぬまま、現在に至っている。

以下、小稿ではこの問題について、新たな視点から検討を加え、試論としてその訓みは「さかのうえのたむらまろ」の東国訛り「サカノヘノテモレマロ」であることを提示し、人物も「坂上田村麻呂」であることを改めて確認する。

## 1 先行研究における訓み方

### （1）『陸奥話記』条文について

『話記』の末尾近く、康平6年（1063）2月25日、前九年合戦の勲功を賞した除目が行われた条がある<sup>1)</sup>。いわゆる源頼義が正四位下伊予守、清原武則が従五位下鎮守府將軍に任ぜられた記事である。そして諸將の叙任記事の後、「我が朝、上古に屢々大軍を発し、国用多く費すと雖も、戎大なる敗れなし。坂面伝母礼麻呂「請降」、普く六郡の諸戎を服し、独り万代の嘉名を施す。即ち是れ北天の化現にして、希代の名将なり」（傍線筆者）と続く中に「坂面伝母礼麻呂」の人名が表れる（図1・2参照）。

岩波『國書總目録』（第七卷）によれば、『話記』の写本・刊本は28本あることが記されているが<sup>2)</sup>、これらのうち、主な写本6本を詳細に校合した笠 栄治氏は、当該箇所について

※ 岩手大学平泉文化研究センター

1) 小稿のテキストは、梶原正昭校注『古典文庫 陸奥話記』（現代思潮社 1982年）を用いた。以下の記述は、同書の内容に即して述べるものである。なお、本書康平6年（1063）2月25日の条（同書55頁）も『百鍊抄』扶

桑略記』などは除目の日付を2月27日とすることは周知のところであるが、逐次注記はしない。同様に、後述の清原武則の「従五位下」も諸書によって異同がある。  
2) 『國書總目録 第七卷』（岩波書店 1970年）635頁。

とを明らかにしている<sup>3)</sup>。したがってここでは、これを前提に論述していくこととする。

この「坂面伝母礼麻呂」、一見すると「坂上田村麻呂」らしいことはおおそ推測できるが、この表記がどのようにして生まれたものか、またいったい何と訓ませようとしたものなのか、という疑問は国文学・歴史学ともに依然として残されたままである。

## (2) 先行研究における訓みについて

はじめに、先学の訓みを見てみる。言うまでもなく、その訓みの根拠はほとんど示されていないため、例示に留めざるを得ない。以下、発表年代順に示す。

この問題を最も早くに取り上げたのは、喜田貞吉氏であろう<sup>4)</sup>。はじめはこれを「サカノモノテモレマル」と訓み、坂上田村麻呂であろうとされた。続けて氏は、坂面をサカノウへと訓ませる可能性を指摘し、伝母礼麻呂はテモレマロで、田村麻呂の訛りかとした<sup>5)</sup>。この考えはその後も継承され、坂上田村麻呂というのは、当時奥州ではサカノヘノテモレマロと訛っていたとした<sup>6)</sup>。

その後、古代史研究者の亀田隆之氏は「さかのものでもれまろ」と訓み、おそらく坂上田村麻呂のことを書き誤ったか、あるいは彼の名が口から口へ語り伝えられていくうちに、このように訛ってしまったのではないかと推測し、『話記』の条文は、田村麻呂の蝦夷征討のことを語っているかとした<sup>7)</sup>。

国文学者の大曾根章介氏は「陸奥話記」（尊経閣文庫本）校訂の中で、旁訓による人名の訓みは保留しつつも、坂上田村麿かとし、本文では「坂面の伝母礼麻呂」とした<sup>8)</sup>。

東北古代史研究者の大塚徳郎氏は、坂上田村麻呂伝説を取り上げる過程で、「さかのものでもれまろ」と訓み、この人物のことは明らかでないが、ともかく、この人物名は坂上田村麻呂との関連で生まれた人名であると考えた<sup>9)</sup>。

国文学者の梶原正昭氏も、前掲『陸奥話記』において「さかのものでもれまろ」と旁訓し、坂上田村麻呂かとしている<sup>10)</sup>。

東北古代史研究者の高橋 崇氏は、はじめその訓みは示さず、坂上田村麻呂のことであろうとし、

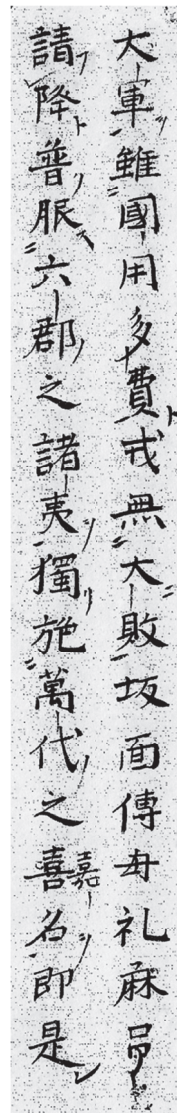


図1 蓬左文庫（部分）



図2 尊経閣文庫（部分）

3) 笠 栄治『陸奥話記校本とその研究』（校楓社 1966年）。

6本は群書類従本・寛文二年刊本・神宮文庫本・蓬左文庫本・松平文庫本・尊経閣文庫本である。

4) 喜田貞吉「坂上田村麻呂は夷人なりとの説—古系図上の一疑問—」『歴史地理』第21巻第4号（1913年）

5) 喜田貞吉「蝦夷の馴服と奥羽の拓殖」（日本歴史学会編『奥羽沿革史論』仁友社 1916年）

6) 喜田貞吉「毘沙門天王考」（『福神の研究』日本学術普及会 1935年）

7) 亀田隆之『坂上田村麻呂』（人物往来社 1967年）

8) 大曾根章介「陸奥話記」（日本思想体系8『古代政治社会思想』岩波書店 1979年）

9) 大塚徳郎『坂上田村麻呂伝説』（宝文堂 1980年）

10) 前掲註1)

『話記』の成立経緯からみて、坂面伝母礼麻呂の件は、民衆の話から採ったと判断せざるを得ず、田村麻呂の名が時代とともに語り伝えられる過程で訛って伝えられたものが、『話記』の作者に伝わったか、あるいは、なにかの事情で作者が書き誤ったのか、と考えた<sup>11)</sup>。その後同氏は、「さかのおもてのもれまろ」と訓み、歴史上このような人物の存在は知られていない。強いていえば、坂上田村麻呂のことと考えられるとしながらも、奇妙な表記にした理由がわからないと『話記』作者へ疑問を呈している<sup>12)</sup>。

国文学者の柳瀬喜代志・松林靖明氏は「陸奥話記」（国立国会図書館本）の校訂の中で、「さかもてのもれまろ」と訓読し、一応坂上田村麻呂かと注記しつつも、先に「田村麻呂將軍」の名が見え、なぜここで「坂面伝母礼麻呂」と表記したのかは不明とした<sup>13)</sup>。『話記』における「田村麻呂將軍」の条は、康平5年（1062）秋8月に、清原武則が子弟ともども万余人の兵を率いて栗原郡の菅岡で源頼義軍と邂逅したとする記事を指し、そこには「昔、田村磨將軍蝦夷を征するの日、此に於て軍士を支へ整ふ」（傍線筆者）とある（図3参照）。

金沢英之氏は、田村麻呂と毘沙門天の結びつきに言及した初期の資料として、11世紀後半の『話記』の条を紹介し、「さかもてのもれまろ」と訓んだ<sup>14)</sup>。

最近、野中哲照氏は『話記』本文の詳細な検討を行い、現存の『話記』はほぼ二段階の形成を経てなったものを骨格として、これをさらに第三次享受分が増補された形をとっていること。それはことに、『話記』冒頭部と終末部に顕著に見られ、その文飾部分から見て、第三次分だけは著しく異質で、改作者（別の人物）が関与したものと考えられるとした<sup>15)</sup>。

その表出のひとつが、「坂面伝母礼麻呂」という不自然な表記であり、さらに「少生、但し千里の外たるを以て、定めて多く之を糺繆せん。実を知る者之を正さんのみ」と後世に託すかのような史実性の偽装に見られることを指摘した。なお、氏は「坂面伝母礼麻呂」については「さかもてのもれまろ」と訓み、人物に坂上田村麻呂を想定し、それ以外の人物を指定するのには無理があろうと考えている。

### （3）先行研究の動向について

以上が、先学における『話記』の「坂面伝母礼麻呂」に係る条文の主な研究内容の概要である。その訓みに関しては、当該研究草創期の喜田貞吉氏の「サカノモノ／テモレマル」「サカノ（ウ）ヘノ／テモレマロ」を除くと、保留の例もあるも「さかもの／てもれまろ」から「さかもの／てもれまろ」に変化していることを指摘できる。つまり、前者の訓読をはじめて示したのが1967年の亀田隆之氏<sup>16)</sup>であり、後者のそれが2002年の柳瀬・松林氏<sup>17)</sup>だということになる。両者の端境期にあたるのが、1991年の高橋 崇氏<sup>18)</sup>の「さかのおもての／もれまろ」の訓みである。その対象人物は、

図3 尊経閣文庫（部分）

11) 高橋 崇『坂上田村麻呂(新稿版)』(吉川弘文館 1986年)

12) 高橋 崇『蝦夷の末裔—前九年・後三年の役の実像』(中公新書 1991年)

13) 柳瀬喜代志・松林靖明『陸奥話記』(新編日本古典文学全集『将門記 陸奥話記 保元物語 平治物語』小学館 2002年)

14) 金沢英之『義経の冒険』(講談社 2012)

15) 野中哲照『陸奥話記の成立』(汲古書院 2017年)

16) 前掲註7)

17) 前掲註13)

18) 前掲註12)

坂上田村麻呂（ないしその周辺）であろうことは衆目が一致している。

また、ウジ名と名前をどこで区切るかについては、高橋説を除く諸氏は「てもれまる」を名前とすることで一致し、ウジ名において異同がある。すなわち「さかのもの」「さかのおもての」「さかもの」などである。そこには3者が「坂面」を、ことに「面（も・おもて）」をどう訓むかにかかっている。つまり「坂の面の」は前2者、「坂面の」は後者ということになる。字面を素直に訓読すると、これ以上の訓みは出ないであろう。

#### （４）『陸奥話記』条文のもうひとつの解釈

ところで、東北古代史研究者の佐々木博康氏<sup>19)</sup>と樋口知志氏<sup>20)</sup>の研究は、上述のような中にあって異色の位置づけを与えることができる。その対象条文を原文で再掲する。

我朝上古屢発<sub>二</sub>大軍<sub>一</sub>。雖<sub>二</sub>国用多費<sub>一</sub>、戎無<sub>二</sub>大敗<sub>一</sub>。坂面伝母礼麻呂請<sub>レ</sub>降。普服<sub>二</sub>六郡之諸戎<sub>一</sub>。独施<sub>二</sub>万代之嘉名<sub>一</sub>。即是北天之化現。希代之名将也。（訓点と句読点は適宜付した）

佐々木氏は、かつて喜田貞吉氏が坂面伝母礼麻呂を「北天之化現。希代之名将也」という点に関連付けて、坂上田村麻呂に擬し、田村麻呂夷人説を提唱したことを取り上げ、喜田氏が坂面伝母礼麻呂と坂上田村麻呂を同一人とみなすことに疑問を呈し、そのキーワードである「請降」の用例を諸史料から10例以上示しながら、解釈次第では、大きく異なることを指摘した。これについては、梶原氏による具体的な批判<sup>21)</sup>があり、詳細はそちらに譲るが、佐々木氏の要点は、「請」をウケルと読んで「征軍たる坂面伝母礼麻呂が敗軍の降参を受け入れた」とみるか、あるいはネガウの意にとりて「敗戦したる坂面伝母礼麻呂が征軍に降参を請うた」と解するかにある。前者であれば両者は同一人物といえるし、後者であれば正史と反することになり、両者は別人と見なければならぬとする。氏の分析プロセスのみを記すと、「請降」の用例はすべて敗軍方が征軍方へ降参を請うということにあり、故にこの条文は、敗軍たる坂面伝母礼麻呂が征軍に降参を請うたものだとした。

すなわち、坂面伝母礼麻呂と坂上田村麻呂は同一人物ではなく、むしろ坂面伝母礼麻呂は征夷の際に坂上田村麻呂に降を請うた人物—夷人ではないかと推し測った。氏は坂面伝母礼麻呂の訓みは示さないが、その人物比定に「母礼」の通字から「盤具公母礼」（『日本紀略』『類聚国史』）を当てている。佐々木氏の仕事の評価は、喜田氏に次いで、歴史学者として比較的早くから伝母礼麻呂に注目した一人だということであろう。

樋口氏は、坂面伝母礼麻呂を田村麻呂と同一人物に想定する場合、以下の3点が問題だとした。1つは本章（2）節で触れた「昔、田村麿將軍蝦夷を征するの日、此に於て軍士を支へ整ふ」を引用し、作者は田村麻呂のことを知っている。知っていながら、（同一人物であるなら）末尾部分で敢えて奇怪な当て字を用いたことの説明をどうつけるか（説明は困難であろう）。

2つめは、佐々木氏も取り上げた「請降」の解釈をめぐる問題で、この条文は「佐々木氏の論ずるように、用字そのものに無理なく解釈するなら、坂面伝母礼麻呂を国家に対して降伏する側の人物として位置付けている」とみるのが穏当だとした。

3つめは、『話記』の記事を読み込んだ上で、『話記』作者は、坂面伝母礼麻呂を田村麻呂とは世代を異にする別人として想定していた可能性が高いこと、などである。

19) 佐々木博康「坂上田村麻呂夷人説についての疑義」『岩手史学研究』第25号（1957年）

20) 樋口知志『『陸奥話記』と安倍氏』『岩手史学研究』第84号（2001年）。なお、樋口説を批判した野中氏（前掲註

15、411頁）は、樋口氏の文献を誤って掲出しているが、その対象は本文が正しい。

21) 前掲註1）。129 - 131頁。



以上より、坂上田村麻呂と坂面伝母礼麻呂は別人であり、また田村麻呂の活躍した時代よりも5、60年も後の時代の「架空の人物」と想定されると結論付けた。なお、氏もその訓みについては記さない。

「請降」については、先述の亀田・高橋両氏も多少問題にしているが、解釈が大きく変わることはない。また、野口氏はこの条文が、第三次後補分に当たると見られることから、それほど大きな問題とは捉えていないようである。

奇しくも、古代史研究者は大なり小なり「請降」問題を取り上げ、中にはいわば一斑をもって推量した結果、『話記』条文が律される傾向を生んだことも否定できまい。これに対して国文学者のスタンスは、比較的ニュートラルな印象を受ける。梶原氏がいみじくも指摘した喜田氏の「サカノモノテモレマル＝坂上田村麻呂」比定から「この安倍氏の叛乱以前に奥六郡の蝦夷の征服に大きな足跡をのこし、万代にその嘉名が伝えられる名将で、北天つまり毘沙門天の化身とされている人物は、坂上田村麻呂以外なく、その推定に随うべきであろう」と「この（請降の）ところはそのまますなおに降を請けてと訓んでおけばよいのではないか<sup>22)</sup>」としたのは、国文学者の見識であろう。同様の見解は野中氏の「(坂面伝母礼麻呂と坂上田村麻呂を)別人とするが、中国や日本の征夷を果した名将との対比の文脈で、坂上田村麻呂を想起しないと考えることには無理がある<sup>23)</sup>」にもみられる。

歴史学者と国文学者の条文の解釈の違いというよりは、当該条文を矛盾なく総体としてどのように見るかというスタンスの違いによるものであろう。

## 2 訓みの方法—試論

ここでは、「坂面伝母礼麻呂」の訓みの検討を行う。

すでに見たように「坂面伝母礼麻呂」、一見すると「坂上田村麻呂」らしいことはおおよそ推測できる。しかし、従来の研究が帰納法的訓読に終始している限り、これ以上の訓みは出ないであろうことは指摘した。

以下のアプローチは演繹的手法による。

坂面伝母礼麻呂と坂上田村麻呂。共通する文字は「坂」と「麻呂」で、これは「さか」と「まる」としてよいであろう。次に「伝母礼」か「母礼」か。これは「面」をどう解釈し、どう訓むかで決まる問題である<sup>24)</sup>。

面は「おもて」で、物の表面が原義（裏・奥の対）だという。面＝表（おもて）となる。古い用例では『宇治拾遺物語』第3話「鬼二瘤被レ取事」の中に「裏表」を「うらうへ」と訓じるのがある。これより面＝表＝うへを導くことができる。「うへ」は上に通じる。

一方、「坂上」の上は「うへ」で「うは」の転、下・裏の対だという。ここで、面と上は語義・訓とともに通じることになる。すなわち「坂上」「坂面」はともに「さかのうへ」あるいは「さかのへ」と訓じたと考えることができる。以上より、ウジ名「坂面」が導き出され、名前は伝母礼麻呂と解することとなる。

「伝母礼麻呂」は「田村麻呂」に対応することが明らかになった。「てもれまる」「たむらまる」である。うち麻呂を除くと分析対象は「伝母礼＝てもれ」と「田村＝たむら」にしぼられる。田村の「た」は「て

22) 前掲註1)

23) 前掲註15)

24) 以下の語義の解釈は、大野 晋・佐竹昭広・前田金五郎編

『岩波古語辞典(第11刷)』(岩波書店 1986年)によつた。

《手》の古形で、手向ひ＝たむかい（てむかひ。反抗の意）の用例があり、古代語においては、「た＝て」は同源だという。次いで田村の「むら」である。周知のように「むら＝村」は「むら＝群」と同根であり、「むれ《群》」の古形だという。ここまでの解析を整理すると、「さかのうへ・さかのへ／た（て）むら（むれ）まろ」の訓みが可能となる。しかし、「母＝も」の問題が残る。実際は「た（て）もれまろ」と訓じているらしい。だが「も」は、「む」の上代東国方言という解説に援けられる。すなわち「た（て）もれまろ」は「た（て）むらまろ」の古訓（一部は上代方言）によって表記されていることを認めてよいことになる。

以上整理すると、『話記』作者は「坂上田村麻呂」を「坂面／伝母礼麻呂」に表記を変えるに際し、その語義と訓を矛盾なく按配したといえよう。先学が指摘してきた「奇妙な表記<sup>25)</sup>」「不自然な表記<sup>26)</sup>」「奇怪な当て字<sup>27)</sup>」ということは当たらないことが明らかになった。

『話記』における「坂面伝母礼麻呂」の訓みは、「さかのうへ・さかのへ／た（て）むら（もれ）まろ」で矛盾なく読めることを指摘できた。従来の訓み「さかのもの」あるいは「さかももの」は否定されることになる。むしろ大正年間に喜田氏によって提示された「サカノウヘ」ないし「サカノヘノ」にきわめて近い訓みとなったのは偶然か。先学の感性に敬服するしかない。

### 3 表記の意味

次に、なぜ『話記』作者あるいはその後の享受者らは、このような表記をとったのかが問われる。実際『話記』中には「田村麿將軍」という正しい表記も行われている個所があり、史上有名な「坂上田村麻呂」の存在は熟知されていたことを知る。その部分はすでに引用し紹介しておいた（図3も参照）。

2章で検討したように、「坂面伝母礼麻呂」の表記は、「坂上田村麻呂」の名前を基礎に語義と訓を文字通り、按配よく配列して作成されている。「坂上」を「坂面」にして「さかのうへ・さかのへ」と訓ませ、「伝母礼麻呂」の「伝」は「田＝た」に通じて「て」に、「村」は「むら・むれ」で「む」を上代東国方言「も」に置換して「母礼＝もれ」になどである。つまり坂面伝母礼麻呂は、明確に坂上田村麻呂の名前を前提に作成されたものであるといえる。

ところで、1章の先行研究において、研究者それぞれの訓みの中で、喜田氏が坂上田村麻呂の訛りかとし、亀田氏は坂上田村麻呂誤記説ないし口伝される中での訛変説を唱え、高橋氏もそのソースを民衆の話から採ったかとし、田村麻呂の名が時代の中で口伝される過程で訛変したか、あるいは作者の誤記かとして、亀田説とほぼ同見解をとっている。

つまり、この表記「坂面伝母礼麻呂」は訛りのもとに作成されたとすると、「も＝む」に見られるように、それは東国ないし奥羽地方の訛りということになる。作者がこのような地方訛りを周知していたかは不明だが、少なくとも『話記』作者の手元には坂上田村麻呂という周知の訓みの他に、坂面伝母礼麻呂に相当する訓みを可能とするもう一つの情報があったと推測できる。

これはおそらく、坂東や奥羽の合戦参加者が現場で語った訛りそのものが、そのまま温存した場合であろう。坂東や奥羽の兵たちが現地で語っていた言葉こそ「サカノヘノテモレマロ」であり、それが作者のもう一つの表現としてここに書き留められたと推測したい。

ところで、『話記』は一面では文芸作品（一編の物語）としての性格をもつ。ややもするとこれを

25) 前掲註12)

27) 前掲註20)

26) 前掲註15)

無視して、すべてを歴史的事実に付会しようとする傾向に陥りやすい。説話文学のもつもう一つの特性である語戯表現という観点から見て、本事例はこれに相当すると解される。縁語や掛詞による「ことば遊び（語戯）」そのものは『風土記』や『新猿楽記』の「語」を引くまでもなく、地名起源説話や人名における嘉名と関わって、古くより試みられてきた。また、古来より和歌等に多く読み込まれてきた手法である。笑いとまでいかななくても、人をあきさせない「遊び」も古典には要求されるのである。

ストーリーをまともに綴った中で、現地言葉を採録しつつ、いささか滑稽で表現している部分といえよう。つまり、古訓に依りながらも縁語や掛詞などの技巧をいささか駆使したのがこの条ということになる。その技巧というのは、考えに考えた技巧ではなく、すらっとでるものであったろう。

『話記』の「衆口」の中には、このような田村麻呂呼称に関わる逸話も入っていたと推定できる。現地言葉の情報である。坂面伝母礼麻呂＝サカノヘノテモレマロは明らかに訛った発音である。作者はここに田村麻呂異伝（聞）としてこの条を挿入したものと考えられる。

## おわりに

以上、3章にわたって『話記』の「坂面伝母礼麻呂」の訓みについて検討を加えてきた。それは『話記』作者が決して奇を衒った架空の人物の造形などではなく、一応「坂上田村麻呂」に落ち着くことを指摘できた。

既述のようにこれまでの問題は、この間の表記の違いについて、どのように解するか研究者間で大きく揺れていた。例えば田村麻呂のことを指すらしいが、それをどう証明するか、あるいは田村麻呂という正しい表記があるのだから、坂面伝母礼麻呂と表記するからにはまったく別人と考えるしかないというものである。

しかしながら、上述のとおり筆者の分析によって坂上田村麻呂の別表記であることが明らかになったことで、これまでの諸問題のおおよそは解決できたといえよう。ここでの『話記』作者は、伝母礼麻呂について、現地情報に基づきながら、坂上田村麻呂に「面」を除く一字訓読みの宛字を語義と訓を意図的に操作しながら、もう一人の田村麻呂を造形したのであった。また「面」と「上」は同義語による置換であった。

この時代、東国においては地方訛りで語られていた坂上田村麻呂。その古訓が地方に残っていたことを特記すべく、作者はこれをどう表記するか考えたと推測される。その中に若干のヒネリを利かせた語戯的置換も行いつつ。

『話記』はいう。「衆口の話拾ひて、之を一巻に注す」と。この条が後補にしても、いくつかの現地情報の中から取捨選択されて、採録された田村麻呂に関する逸話の一つであったのが坂面伝母礼麻呂であったといえよう。

筆者は文献史にきわめて疎い。そのため、思わぬ誤読や思い違いをしているかと思う。ご叱正をたまわれれば幸いである。